

人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」ブックレット

新しい地域文化研究の 可能性を求めて

2018.3
Vol.2

歴史と文化のよりどころを求めて
—福島県只見町から

人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館

久野俊彦・小池淳一



2018.3
Vol.2

新しい地域文化研究の 可能性を求めて

人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館
久野俊彦・小池淳一

新しい地域文化研究の可能性を求めて

はじめに

歴史と文化のよりどころを求めて―福島県只見町から

1. 地域史の先に見えてきたもの

4

2. ホウインという存在

16

3. ホウインをめぐる書物世界のひろがりつつながり

26

4. 歴史と文化を伝えるとりくみ

40

はじめに

どんな地域にも歴史があります。またそこには、人びとの生活の積み重ねによって生み出されてきた文化があります。地域の生活が変化や変動に直面したときに、さまざまな条件をふまえて、その未来のすがたを考えることが求められます。その際に、地域の長い生活の積み重ねからはぐくまれ、伝えられてきた歴史や文化は、もつとも大切な手がかりのひとつといえるでしょう。

国立歴史民俗博物館の「地域における歴史文化研究拠点の構築」という研究ユニットでは、日本列島上の地域社会が大きな変容を遂げようとする時に、それぞれの歴史や文化の厚みや深さを意識し、次の世代へと継承していくための拠点について、はば広く調査研究をおこない、検討を加えています。地域の未来を考えるときに、こういった歴史や文化にどのようにアプローチすればいいのか、その手がかりやよりどころとなるものは何なのかを考えてきたのです。

このブックレットでは、そうした試みを具体的な成果に基づいて、紹介してみたいと思います。とりあげる地域は一箇所ですが、そこにくり広げられる歴史や文化の内容とともに、同じようなアイデアや取り組み方で、みなさんの身の回りの歴史や文化を考え、活用していくことができないか、を氣にかけて読み進めていただくことを期待しています。

ここでは福島県の奥会津地方の只見町でのわたしたちの取り組みとその成果を具体的に述べていきます。最初に只見という地域の特色とそこでおこなわれてきた歴史や文化に関する調査研究

について述べてみます。次に、最近の大きな成果である里修験―只見では「ホウイン（法印）」と呼ばれてきました―について説明し、彼らが伝えてきてくれた資料をもとにどのような歴史像が描けるのかを考えてみます。さらに、それらをふまえて、地域において歴史や文化をとらえ、未来につなげていくためにはどういった観点が必要なのか、中間的な、とりあえずのまとめを試みたいと思います。

このブックレットを手にとられる方々にはお願いしたいのは、これが只見という日本列島のなかのひとつの地域での調査研究の営みの報告ではなく、ひとつの地域の歴史や文化をさまざまな条件や資料をもとに考えていく課題のとりあげかた、深めかたの一例としてとらえていただきたいということです。只見という特殊な事例ではなく、地域ごとに歴史や文化を考えていく際の目のつけかたや深めかたの提案として受け止めていただけることを願っています。

それでは只見という地域の紹介からはじめましょう。

平成三十年二月

歴史と文化のよりどころを求めて

―福島県只見町から

久野 俊彦・小池 淳一

1 地域史の先に見えてきたもの

(1) 只見というところ

◆只見の位置とあゆみ

福島県南会津郡只見町は福島県の西南に位置していて、さらに新潟県へと連なっているところです。総面積は七四七・五km²で、東京の山手線内側全体よりも広いのですが、そのうちの94パーセントが森林になっています。冬期は町全体が雪におおわれ、わが国屈指の豪雪地帯という評価がされるほどですが、町の中央部を流れる伊南川や只見川の流れや四季の移り変わりによって多様な生活が営まれてきました。人口は現在、約五千人ほどです。

現在の只見町は、伊北村と明和村との合併を経て、昭和三四年（一九五九）に朝日村との合併により発足しました。江戸時代にはこの地域は「南山御蔵入」と呼ばれる幕府直轄地もしくは会津藩の預かり地となっていました。

戦後、只見川とその流域にはダム建設を中心とする電源開発事業が展開し、政治的社会的な話題となり、それによって地域は大きく変貌したことは確かです。特にダムの底に石伏や田子倉といった集落が沈んだことは生活文化とその歴史を考える上では大きな画期といえることができるでしょう。こうした電源開発の様子は城山三郎の小説『黄金峡』（一九五九年）のモデルとなったことでも知られています。【写真1, 2】



写真1 早春の只見町只見の風景。



写真2 厳冬の只見町。滝湖から十島集落をのぞむ。

かつての田子倉における生活の様子は、現在、「ただみブナと川のミュージアム」の分館となっている「ふるさと館田子倉」で多くの資料からうかがうことができます。また国立歴史民俗博物館第6展示室ではダムの建設と田子倉集落の景観がジオラマとして展示されています。【写真3】

◆只見の自然とその価値

自然環境の面から注目されるのは四〇、〇〇〇ヘクタールにも及ぶブナ林です。ブナは北半球の冷温帯地域を代表する落葉高木で、世界各地では伐採が進んでいるのですが、只見のブナ林は手つかずで安定した生態系をはぐくんでいます。高木層、亜高木層、低木層、草本層の四つの層構造が見られ、動植物の豊かな展開が確認できるほか、山菜やキノコなどの恵みをもたらしてくれる森林です。【写真4】

こうした自然環境を背景に平成二六年にはユネスコエコパ―



写真3 国立歴史民俗博物館第6展示室のジオラマ



写真4 ブナの森

クとして登録されています。これは只見町全域と檜枝岐村の一部が該当し、世界的にも只見の自然が価値あるものとして認められたものといえます。エコパークでは土地利用の区分として、生物の多様性・自然環境を保全する核心地域、核心地域を守るために立ち入りを制限する緩衝地域、環境に配慮しながら持続可能な社会をめざす移行地域の三つの地域を設定しています。これによって世界的に貴重な自然と現代の只見の人びとの生活との共存が図られています。

他にも只見の自然に関する調査研究の成果としては、絶滅危惧種とされているユビソヤナギが只見川、伊南川とその支流の沿岸で残っていることが確認されたこと【写真5】やサンショウウオの新種であるタダミハコネサンショウウオが二〇一四年に発見される【写真6】など、話題に事欠きません。豊かな自然が残されているだけではなく、それらに対して丁寧な学術調査がおこなわれ、その成果が地域に還元されつつあるといえます。「自然首都」というのが只



写真5 ユビソヤナギの芽



写真6 タダミハコネサンショウウオ

見町を短い言葉で表現する時に用いられる言い方ですが、まさにその名に恥じないものがこの町にはあるといえるでしょう。

このような豊かな自然のなかの只見町という地域社会で歴史や文化に関する調査研究はどのように進められてきたのか、次に見てみましょう。

(2) 調査研究のつみかさね

◆歴史をさぐる

只見町域の歴史を考える最初の試みは一九七〇年に刊行された『図説会津只見の歴史』でした。ここでは通史的な叙述とともに、豊富な図版などで、只見という地域社会の歴史を考えるための材料が集成されました。一冊という分量から、全ての時代あるいは研究のジャンルに十分な材料が収められたとはいえませんが、奥会津の生活とその歩みを考える上で、貴重な資料が提示されています。

次いで一九八九年から町政施行三十周年を契機として『只見町史』の編さん事業がはじまりました。この事業によって、福島県会津地方をはじめとする県内各地、あるいは日本全体の自治体史編さん事業とほぼ同等の学術的な検討や分析に耐えうる、地域社会にとって重要な資料が集められました。資料を翻刻して利用しやすいように提示したほか、通史編によって町域の歴史が古代から現代にいたるまで一貫したものとして描かれました。

この編さん事業は、地域社会のなかでは古文書と呼ばれる文字資料を広く求め、それを時間軸

のなかに位置づけることが基本であり、前提でした。町内の旧家や公的な機関などに保存されていた資料が数多く集められ、解説が進められました。所有者の了解を得てコピーが作られ、内容を読みとって、その性格や意義についての議論が行われていきました。所蔵者ごとにリストが作られ、その目録をもとに、どのような資料が残されているのかを、まず大まかに把握し、さらにその内容を読み込むことによって、時期や場所ごとに起きたできごとを具体的に描いていくことが試みられたのです。【写真6】【写真7】

地域の人びとのたどってきた生活の積みかさねを、さまざまな角度から検討するための基本的な材料、素材、情報源としては、一般に地方文書^{じかた}が重視され、それらを地域の人びとの動きや関係性をさぐる際の大きな手がかりとして位置づける作業が地道に続けられました。このことは只見に



写真6 只見町史と関連刊行物



写真7 町史の調査風景

限ったことではなく、地方史の研究として日本列島各地で長い時間をかけてとりくまれた大きな運動といつてよいものでした。政治や経済の中心であった京都や大坂、あるいは江戸だけではなく、地域ごとに歴史があり、そこでくり広げられた生活の積みかさねを、地域に残され、伝えられてきた材料にもとづいて考えることは、歴史の担い手を一部の有名な人物に限ることなく、たくさんの方の具体的な事実の解明に基礎をおきながらとらえることでもありました。

◆只見の歴史と文化の特徴

そうした点で、地方文書の発見、確認とその解読が地域の歴史を考える際の基本であることはいうまでもありません。ただし、そのなかでも比較的稀少な問題をめぐる資料や、思想や文化にかんする資料については、地域史の枠組みのなかでは十分に位置づけることが難しい場合もありました。自治体史のなかには、近接する地域の歴史的な展開にならって、時代区分や問題設定をおこなうことがあり、特に明治以前の前近代における叙述には、似たような分類や執筆姿勢でのごむために文学や信仰などの特異な領域についての検討や位置づけが不十分になる場合もあったのです。こうした問題をきちんと考えていくためには、地域の歴史をひとまず描いた上で、より細かく資料を検討し、それぞれの問題に関する資料の性質や特性をふまえた分析をすすめる必要があります。

只見では町史が完成するのと同様にして、自然の領域では先にふれたブナをはじめとする植物やそれとかかわる動物、さらには豪雪地帯といった環境面からの調査研究が進められました。歴史や文化にかんする問題としては巻物についての調査をおこなうことになったのです。

只見町では番匠ばんじょうと呼ばれる大工や屋根ふきなどの建築関係の仕事、元山もとやまや木挽こびき、山先やまさきという山林関係の仕事、桶や樽、鍛冶などの特殊な技術にもとづく仕事、さらには祝儀の時の小笠原流の礼法の心得など巻物を授けられ、大切に持ち伝えるという習慣がごく最近まで一般的でした。こうした職人巻物は、全国的に全く例がないわけではないのですが、一定の地域に非常に濃密なかたちで数多く伝えられているのは極めて珍しい問題でした。

このような特異な問題に取り組むには、地域史の枠組みや地方文書の解読だけでは不十分でした。地域史にこだわり過ぎると、かえってその価値や意味をとらえそこなう場合や、生活や民俗の文脈を無視することにつながり、貴重な文化をとらえそこなう可能性さえあったのです。こうした場合に重要なのは、地域という枠組みをふまえながらも、文化や思想、民俗や文学といったテーマに即した歴史研究の蓄積を参照すること、そして既成概念にとらわれない柔軟な分析をおこなう必要がありました。

只見の巻物については中世史の研究における職人をめぐる成果を意識しつつ、片方では民俗学的な調査をおこない、巻物のくらしのなかでの位置づけや、巻物をめぐる意識についてのデータを広く集めました。そして巻物そのものの内容にもふみこんで、福島県や東北地方といった地域史が重視する枠組みをこえて、全国各地の類似の資料との比較検討もおこなったのです。そうした作業の成果は『会津只見の職人巻物』（二〇〇二年）として、とりあえずまとめられました。が、只見の歴史や文化を考える際の大切な視点として、まだ研究の余地があります。こうした地域に根ざしながら、地域をこえる課題があることを意識することが、地域の歴史や文化にとりくむ場

合の新しい視点ということが出来ます。只見における巻物という資料の発見と分析は、そのことを具体的に教えてくれたのです。

◆只見の民具

生活とのかかわりという点では、民具に関する調査研究も只見の特徴としてふれておく必要があるでしょう。只見町は会津地方のなかでも、もっとも奥まったところに位置しており、民俗学では山村というところえかたがなされてきました。そうした地域では、仕事を効率良く進めたり、日常の生活を維持するために、独特の道具が発達する場合があります。只見の日常生活用具——民具という言葉がかたがよくされます——も、この地域の文化的な特色を示しています。これらは直接、絶対年代のなかに位置づけることは難しいのですが、おそらく、高度経済成長の時代が訪れるまでは、かなり長い期間にわたって用いられ、それらを作り出し、使いこなす技術とともに生活を支えてきました。これも只見の文化を示す資料としては重要です。【写真8〜14】



写真8 民具を集める



写真12 只見の民具（2）山樵用具



写真9 民具調査のようす



写真13 只見の民具（3）カゴやザルなど



写真10 只見の仕事着



写真14 民具収蔵のようす



写真11 只見の民具（1）漁撈用具

こうした民具は、近年の生活のなかでは使われなくなり、倉などにしまいこまれて、それをめぐる記憶も薄らぎつつありました。あらためて歴史と文化をさぐるための手がかりとして、民俗学的に整理し、その意義を考える作業を進める必要がありました。町内の家々からたくさん民具を集め、本格的な整理事業が開始されたのは一九九〇年のことでした。古めかしくて懐かしい道具に、あらためて光があてられたのです。

その際に留意されたのは、民具を生活の記憶と結びつけながら整理し、資料化することでした。実際にそれらを作り、使った経験のあるお年よりに作業に参加してもらい、計測をするとともに、使用方法やそれにまつわる思い出なども一緒に記録することにしたのです。

こうして整理された民具は、仕事着・農耕用具（水田耕作用具）・山樵用具・漁撈用具・狩猟用具などに分けられ、生業と生活の様相をしのび、具体的にふりかえることのできる重要な資料として位置づけることが可能になりました。こうした一連の整理作業と民具の豊かさが評価されて二〇〇三年には「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」として国の重要有形民俗文化財に指定されています。

◆ホウイン文書の発見

こうした只見における歴史と文化にかんするさまざまなとりくみのなかで、それでも位置づけにとまどう資料がありました。それはホウイン（法印）とよばれる里修験の家に伝えられていたたくさんさんの書物と断片的な經典や古文書——これらを聖教しょうきょうと呼びます——でした。

書物はそのかたちや内容からして、地域の歴史とはそれほど深くかわらないように思われまして、經典のたぐいは専門的過ぎるとともに、只見のくらしとのかかわりがはつきりしませんでした。ホウインというのは山で修行することが中心であるはずの山伏（修験者）をさすことです。そのホウインが、本来は只見の人びととどうかかわってきたのかは、江戸時代の宗教制度の末端における存在として、地域史研究においては、それほど重きをおかれてはいなかったのです。こうしたホウインに坎する資料は解読しても、その内容は、修験道という特定の宗教に偏っていて、地域社会とその歴史とは関係がないようにも思われました。寺院とお坊さん（僧侶）とか、神社と神主さんなどであれば、現代の暮らしのなかから、類推して資料をとらえることもできますが、ホウインは明治のはじめにその役割を終えてしまったためになじみもうすく、その価値や意義を知ることが難しかったのです。

そのために、こうしたホウインの家に伝えられてきた資料は、あやうく廃棄されてしまうところでした。町史編さんのために多くの家々からたくさん古文書を借り出し、目録を作り、町の歴史を叙述するために活かしていく作業をするなかでも、ホウインの資料はきちんと位置づけることができないでいました。あまりにゴチャゴチャしていて、体系も系列もわからないために捨ててしまおうか、とまで言われていたのです。

わたしたちは、歴史研究のなかに民俗学の視点を取り入れた巻物調査の過程で、ホウインの資料にも接したので、捨てるのではなく、こうした資料そのものをきちんと解読し、さらにその内容を、生活のなかのまじないや占い、祈祷や信仰との関連で理解しようとしてはどうだろうか、

と考えました。いわゆる地方文書とは異なる価値基準で資料を見て、研究資源としていこうと思ったのです。【写真15】

そしてホウインという存在を只見の歴史のなかに位置づけ、文化として評価する作業に取り組んだのでした。それはホウインから見た只見の文化の流れや特色を見つめることでした。町史で描かれた歴史像を参考にしながらも、それとは異なる角度から只見の文化を問いなおすことにつながっていききました。以下、その内容を紹介してみたいと思います。

2 ホウインという存在

最初に、このようにして見出されたホウインが主として活躍していた江戸時代の只見について、史料や記録に基づいて確認してみましょう。またホウインがどのような活動をしていたのかについてもわかる範囲で述べておきます。



写真15 ホウイン文書の調査

(1) ホウインの活動した環境

◆江戸時代の只見村

会津のなかでも阿賀川・只見川上流域、中世の長江庄にあたるとされる地域が、南山御蔵入と称されるようになったのは寛永二〇年（一六四三）です。それより以前からこのあたりは伊北郷と呼ばれ、伊南川上流の伊南郷や只見川下流の金山谷とともに人びとの暮らしが営まれていたと思われるが、それを具体的に知ることのできる資料は多くはありません（なお、近年の新たな資料の「発見」とその意義については、『奥会津の戦国文化をさぐる』（二〇一八年）というシンポジウムの報告書をご覧ください、と思います）。

江戸時代の只見あたりの生活も紆余曲折はありましたが、一定のまとまりと文化とがあると思えられてきました。今日の奥会津地方を、幕府や藩の行政上の区分として「南山御蔵入」と言いましたが、それ以前の古くからのゆるやかなまとまりが、反映されたもととらえることができます。

そうした南山御蔵入の中でも、只見川と伊南川とが合流するところに只見村がありました。この只見村は『新編会津風土記』（文化六年・一八〇九）によれば、「家数九四軒、東西五〇間・南北二十三町、散居ス」とあって、只見川の兩岸を結ぶ船渡場もあり、山間の集落であると同時にこのあたりの交通の要衝にあたり、比較的賑やかな里ではなかったでしょうか。【写真16】

只見川については「村東一町ニアリ、石伏村ノ境内ヨリ来リ、村ノ辰巳ノ方ニテ檜枝岐川合シ、丑寅ノ方ヨリ流ルルコト一里余、本郡大塩組蒲生村ノ界ニ入ル、此川水源ヨリ金山谷ヲ経テ牛沢

組柳津村ニ至ルマテ数十里ノ間、兩岸^{そばだ}岨チ水勢甚急ナリ、只此処^{すこし}ノミ少ク開ケテ東西二十町・南北三町計リノ河原アリ」として、急峻な谷間から流れ集まった川の水が平らな土地に流れ出て、それにより河原が形成されていたことがわかります。

延享三年（一七四六）の「只見村差出帳」には、只見の家数はちようど百軒と記されています。その内訳は百姓が四五五人、他に馬医者、大工、鍛冶、杜家（神主）が各一人づついて、さらに木挽（きこり）と山伏（ホウイン）がそれぞれ二人いるとなっています。農業に従事している人たちだけではなく、それ以外の職種の人もいて町場のような雰囲気もあったかもしれません。

◆史料（近世文書）に見える修験（ホウイン）の活動範囲

この地域の修験すなわちホウインの様相については、宝暦五（一七五五）年「伊北郷之内六ヶ村修験



写真16 只見川と伊南川合流点

分限改帳」によって、よりくわしく知ることができます。この古文書には七軒の修験の名があり、只見村の修験としては吉祥院と文殊院とが記されています。吉祥院は、父親である龍泉院と同居していると記され、霞（ホウインが御札を配ったり、祈禱をして歩く範囲）としては、塩沢村に四五軒、十嶋村に二〇軒、そして只見村のうち、三〇軒がそれにあたるとされています。

もう一軒のホウインであった文殊院は石伏村三〇軒、田子倉村二〇軒、叶津村二〇軒、蒲生村四〇軒、さらに只見村のうち三〇軒と、吉祥院よりもやや広い範囲にわたって霞を持っていたとされています。このことから、只見村のホウインは、自分たちが住んでいる村だけではなく、それ以外の村でも活動していて、村から村へと日常的に移動しながら活動していたことがわかります。

こうした活動のありかたは、この地域にあつては普遍的なことであつたようで、「伊北郷之内六ヶ村修験分限改帳」に記されている小川村の龍登院は、小川村以外に小林村にも霞を持ち、布沢口村の瀧沢院も布沢口村だけではなく、瀧原村、布沢村にも霞を持っています。さらに樋戸村の龍蔵院の場合は、樋戸、下荒井、上荒井、黒谷、長浜、熊倉、泥嶋、大倉、布沢、瀧原の一一ヶ村におよぶ広域を霞としており、ホウインの活動が、かなり広範囲を対象としていたことがわかります。

◆会津におけるホウイン（修験者）の組織

こうしたホウインは修験者ですから、江戸時代には宗教者を支配する組織の一員でもありました。それは行政のしくみと深く関わっていましたが、基本的には独自のものでした。会津一帯に

おける修験者は、大多数が京都の聖護院を頂点とする本山派という組織の一員となっていました。藤田定興氏の研究（『近世修験道の地域的展開』）によると会津地方では会津若松に居住していた南岳院が大先達として全体を統括し、南山御蔵入では田島の南照寺が小先達として、この地域のまとめ役だったとされています。

会津若松の南岳院は慶長年間（一五九六―一六一五）その存在が知られていて、中世の豪族、長沼氏に連なる家という由緒を持っていました。田島の南照寺も先祖は近江の密教にかかわる僧侶で、山ノ内氏に従って会津に至り、修験に改宗したと先祖の事績を記した『当寺諸旧記秘書』（これは文化年間（一八〇四―一八）にまとめられたと思われる）で主張しています。

会津藩と南山御蔵入では、修験者は年行事、准年行事、小先達、頭巾頭、別当、格地、願人頭、走客、谷老僧、同行、末寺という区分に位置づけられ、統制されていました。さらに南山御蔵入では、上通、中通、下通という独自の修験の区分があり、峯入りなどの大きな修験者たちの活動に際して負担する金銭の額が異なっていたようです。文政から弘化（一八一七―一八四八）にかけての只見町域の修験は、只見の文殊院、吉祥院ともに中通で、櫛戸の龍蔵院が谷老僧で上通、小川の川院は下通とされていました。只見町域では、櫛戸の龍蔵院がやや上位に位置づけられて、指導的な役割を果たしていたようです。しかし、いずれの修験者も村に定住していて、修行というよりも、人びとの生活のなかでのさまざまな依頼や期待にこたえる行為が、その活動の中心であったと思われます。

なお、こうしたホウイン（修験）の来歴を考える上で注意しておきたいのが江戸時代より前、

すなわち中世における修験者の活動です。会津地方では、喜多方市に鎮座している会津新宮熊野神社が鎌倉時代の初期に勧請されたといわれていることに加えて、『熊野那智大社文書』からは、応永から文明年間（一三九四～一四八七年）にかけての熊野信仰の広がりが確認できます。また田島の真言宗寺院である薬師寺は熊野先達であり、近世に会津の修験を統括するようになる南岳院とも深い関わりをもっていたと推測されています。

これらのことから、会津の地では遠く紀州（和歌山県）の熊野三山に対する信仰が中世から厚く存在していたことがうかがえるのです。そして、このことは只見町の成法寺から「熊野卅三所巡礼」と記された永正九年（一五二二）の巡礼札【写真17】が近年、発見、確認されたこととも響き合うと思われます。

（2）ホウインの活動内容—吉祥院を中心に

◆吉祥院の資料から

このような組織のなかで、活動していたホウインの具体的な生活はどのようなものだったのでしょうか。それを比較的、資料が多く残されている吉祥院（五十嵐家）を中心に考えてみます。



写真17 熊野三十三所巡礼札

この吉祥院に関連する資料としてもっとも古いのは文書ではなく鰐口です。鰐口というのはお堂などにかけて、綱などで叩いて音を出して神仏を拜む法具ですが、おそらく吉祥院がまつっていたお堂で使われていたものと推測されます。この吉祥院の鰐口の銘文には応仁元年（一四六七）とありますから、室町時代のものであるということになります。鰐口だけが移動して只見にもられた可能性もありますが、そうだとした場合でもこうした古い法具を用いるだけの必然性がホウインにはあったことを示しているといえるでしょう。【写真18】

具体的なホウインの活動をうかがうことができる資料は江戸時代のものが中心になります。

先に見た「伊北郷之内六ヶ村修験分限改帳」の吉祥院の記述では、不動滝山、不動堂、観音堂、雨宮風宮という五つのお宮やお堂を管理しています。さらにそこでは、吉祥院を記載する場合、必ず、不動滝別当という文字が添えられています。これは同じ只見村のホウインである文殊院はもちろん、「伊北郷之内六ヶ村修験分限改帳」に載せられている他のどのホウインにも付されていないものです。おそらく吉祥院は修験道で最も重要とされた不動明王と只見村の中の滝とを結びつけることで、独自性を主張していたのではないか、と思われます。



写真18 吉祥院（五十嵐家）旧蔵の鰐口

修験・山伏という宗教者は山岳での修行をその霊的な根拠とするとされていますが、実際に村のなかに住んでいたホウインは、より日常的な範囲での堂社や修行の場の管理を大切にしていたのでしよう。そうした姿は村びとたちにとっても親しみやすいものであったに違いありません。さらに吉祥院の活動内容は、「諸牘守書認様事」(宝暦九年・一七五九)からもうかがうことができます。この文書には、神仏を拝むために人びとが集まる日待という行事に用いるお札や、瘡などの病気を治すためのお守りなどに記す字句や梵字、さらにその由来などが記されています。こうした村の行事や病気治しにホウインがかかわっていたことがうかがえます。

◆陰陽道とのかかわり

このように、村のなかで日常の生活に寄り添うような活動をしていたホウインは、宗教的には神と仏をとにもまつり、修験道や仏教のなかでも密教の経典をよりどころとした活動をしていたようです。それは只見に限らず、奥会津、そして東北日本でも広く確認できる様相でした。しかし、吉祥院の残した資料を細かく見ていくと、暦日や方位にまつわる独特の知識体系である陰陽道に関するものもあることに気づかされます。その点についても見ておきましょう。

「文化七年和談」(仮題)という文書は、修験道の中心(本山)である聖護院と陰陽道の中心(本所)である土御門家との間で、占いをめぐって交わされた裁判の記録で、修験道と陰陽道の両者の主張が記されています。これによって、ホウインの属する修験道の組織にも陰陽道とよく似た占いを行うことが認められていたことがわかります。他の地域では陰陽師がおこなうような占い

を、ここではホウインがおこなっていたことがわかる記録といえます。

また「陰陽道御條目」という文書もありました。これは陰陽師の仕事の内容を、陰陽道の本所である土御門家が明和二年（一七六五）に確認したものです。ここでは、「判はんし諸事占方之事」「神道行事一切之祈禱之事」「地祭家豎五穀之祭之事」「四季之荒神之祓并札守之事」「曆年筮配申候事」「秘符ましなひ矢除之守之事」「日曆十二神之札并神馬之札之事」「千寿万歳之事」などが挙げられています。さらに、吉祥院が所蔵していたものには「巫女職勤之事」「占考広可相勤事」等といった項目も付け加えられていました。京都や江戸では競合するために裁判が起こされているような、棲み分けが必要な問題についての情報が記されているのです。こうした文書の存在はホウインが陰陽道の知識にも注意をはらい、時にはそれらを村での日常的な活動に用いていたことを暗示していると思われます。すなわちホウインは陰陽道の知識にもかかわり、陰陽師のような役割もはたしていたのでした。

こうしたホウインと陰陽道との関係については、のちほど、ホウインが持っていた典籍をふまえて改めて考えてみようと思います。ここではそうした他の組織の宗教知識にまでアンテナを張っていた姿を記憶しておきましょう。

◆ホウインの終焉

村のなかでさまざまな宗教的な知識をもとに活動していたホウインは、現在の只見ではほとんどその存在は忘れられてしまっています。それは明治の初めの神仏分離という大きな改革がもた

らしたものといえます。それによってホウインたちが得意としていた神も仏も、仏教の經典も神道の祝詞も必要に応じて自在に使い分けるといふ活動が否定されたのです。またホウインたちの組織的なよりどころであった修験道自体も廃されることになってしまいました。

只見のホウインであった吉祥院は、明治三年（一八七〇）に、只見村の肝煎（今の村長にあたる）といえるでしょう）から田島にあった役所への願ひ出の書類に、復飾（ここでは、ホウインをやめて神主になったこと）したけれども、村には三人も神主がいて、生活に困っているのもとの修験に戻りたいという意向がある、と述べています。しかしこのことは許可されずに、吉祥院の子孫である五十嵐家は寺子屋をひらいて、村びとたちの教育に携わったと伝えられています。

また村に残された明治時代の飯豊山に登る講に関する記録からは、吉祥院の子孫もメンバーの一人として参加し、集会場所も提供していることがわかります。この参加はホウインとして、というよりも村びとの一人としてでしょう。飯豊講に加わり、その構成員となったことは、ホウインがその宗教性を脱していたことのあらわれといえます。

おそらく中世から只見で宗教的な活動を中心として、重要な役割をはたしてきたホウインはこうした近代の幕あけの時期に宗教性を脱することで新たな道を歩みはじめたのでしょう。それは狭い意味では活動の終わりでしたが、教育などの他の仕事につくことで新たなくらしを模索したのです。ホウインに関して改めて光をあてることは、前近代の只見の生活と宗教とのかかわりを探ることにつながっているといえるでしょう。

3 ホウインをめぐる書物世界のひろがりつながり

ホウインの存在とそれが担ってきた文化を考えることは、只見という地域の宗教的な文化のあゆみと深く結びついています。そのことは古文書によって推測できることも少なくありませんが、宗教的な要素の内容についてははつきりとはしません。幸いなことに、ホウインの家には古文書だけではなく、書物や経典も数多く残されていました。それらは地域史の資料としては特殊すぎて利用しづらいのですが、宗教史や民俗信仰の視点からとりあげれば、雄弁にその意味を語り出します。

以下、歴史文化を探究するよりどころとして、ホウインが蓄積した書物の世界に分け入って、その意味するところについて見ていきましょう。

(1) 陰陽道知識の利用

◆陰陽道書『簠簋傳』

吉祥院が伝えてきた書物のなかで、とくに注目されるものとして『簠簋傳』^{ほきでん}という本があります。この『簠簋傳』は中世において陰陽道に関するさまざまな知識を集大成した書物『簠簋』の写本です。【写真19】

『簠簋』とは正式名称を『三國相伝陰陽道輶輶簠簋内傳金烏玉兔集』^{さんこくそうでんいんようようかんかつほきないでんきんううたよくしゅう}といいますが、あまりに長いので、通称として『簠簋』とか『金烏玉兔集』と呼ばれる場合があります。有名な平安時代の

陰陽師、安倍晴明が書いたということになっていますが、実際のところ、鎌倉時代以降に成立したものらしく、その際には陰陽師以外に真言宗の僧侶が関わったのではないか、と言われています。この『簠簋』は、江戸時代になると版本としても刊行され、広くさまざまな人びとに利用されたものと考えられています。

『簠簋傳』はそうした『簠簋』のうち、中世にまで遡ると推定される古いかたちの写本であり、中に元龜三年（一五七二）という書き入れがあることから、写された時代がわかります。しかも山村において修験道の担い手であったホウインである吉祥院が所持していたことから、極めて珍しいものといえます。これまでに知られてきた中世の『簠簋』の多くが、大きな寺社の文庫やそれを引き継いだ図書館などに所蔵されているのに対して、『簠簋傳』は、地域生活のなかで具体的に庶民のために活動をくり広げていたホウインの蔵書です。そして貴重書としてしまひこまれていたのではなく、前章で見てきたような江戸時代から近代にかけての書物や経典、古文書と一緒に活用されてきたらしいことが重要です。

つまり、大切な本としてしまひこまれていたのではなく、ホウインの宗教活動に用いられてき



写真19 『簠簋傳』全三冊

たので、読まれた本というよりも使われた本としての意味があり、そこに価値があるといえるでしょう。なかでも『簠簋傳』の最初や最後の余白の部分に書き込みがあることに注目すべきです。こうした後代の書き込みは、『簠簋傳』が長い年月にわたり実用に使われたことを示しています。難解な宗教の典籍とそこに記されている知識が、どういった利用のされかたをしたかに迫ろうとするときの重要な資料ともいえるでしょう。

◆『陰陽雑書』とその内容

吉祥院の『簠簋傳』は中世にさかのぼる貴重な陰陽道書ですが、それが孤立した特殊な存在ではなく、実は周辺のホウインの蔵書にも関連するものがあるという点を忘れてはなりません。隣村の楯戸には龍蔵院というホウインが活動していましたが、この龍蔵院にも『陰陽雑書拔書』と呼ぶべき、やはり中世にさかのぼるであろう書物が二冊伝えられていました。【写真20】雑書というのとは、雑然とした本という意味ではなく、曆注や卜占、まじないに関するさまざまな多種多様な知識を集めた書物という意味で、陰陽道ではよく使われることばです。龍蔵院の本は表紙が失われてタイ

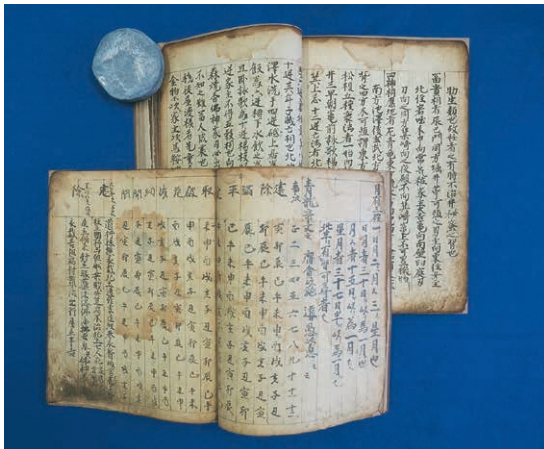


写真20 『陰陽雑書拔書』二冊

トルが定かではありませんが、吉祥院の『簠簋傳』と同じくらい古いと思われます。これを仮に『陰陽雑書拔書』として、それぞれA本、B本と名づけておきます。

A本には永祿六年（一五六三）という年記があります。B本には年記はありませんが、中世の末から近世初めころの写本と思われます。大まかにB本はA本よりは小規模に抜書されたものといえます。

A本のなかには、田水始めの日、種蒔く日、山入り日など、生活に密着した日取りの吉凶が記されています。前表紙は破れて失われてしまっているものの、その一部と後表紙が残っており、もともとの装丁を推測することができます。A本、B本ともに各ページには何度もくりかえしめくったためにできた手擦れの跡があり、吉祥院の『簠簋傳』と同じように陰陽道の知識を用いるために長期にわたり大切に参照されたことがうかがえます。

『陰陽雑書拔書』A本には、暦注以外に行事の由来や作法を記述した項目があります。そのなかでも、節分行事の作法である「鬼目打時作法」を抜き出してみましよう。

鬼目打ツ時ノ作法

先、節分夜、歳徳方向、『心経』三巻読、次歌詠云。「打ソ鬼ハ外トエハラ／＼ト出ニケリ、福ノ三内ヘ入り豆ノヲト」其後、大豆ヲ一ツカミ、ツカミテ、一角エ三度ツ、可打也。先ツ「富ハ内ヘ入」打、「鬼ハ外ヘ出」ト打、「福ハ内ニ入レ」ト打留ムヘシ。此如、四角ヲ打ハ、三十四度也。十二月ノ不祥ヲ払テ、福寿召表示ナリ。

又云、一角ヲ四度ニ打。其時ハ如斯前、『心経』詠歌後、大豆ヲツカミ、先ツ「十二打」

ト打テ、次ニ「鬼ノ目ヲ打」ト打、次ニ「鬼外へ出」ト打、次「福ハ内へ入」ト打留也。加様四角ヲ打ハ、四々十六度也。一年中、春夏秋冬、四季四方ノ不祥ヲ払、召福徳表相也。

これによれば、節分の夜は、まず歳徳神がいる明きの方に向かって『般若心経』を読み、「打つぞ鬼は外へはらはらと出けり福の三つ内入り豆の音」というまじない歌の「歌よみ」をした上で、大豆をつかんで、部屋の四隅に三度ずつ豆を打ち、「富、内に入れ。鬼は外へ出よ。福は内に入れ。」と言うというのです。一部屋の四隅で三回ずつ十二回豆を打つのは、一年十二か月の災いを払って福徳を招くためであり、また、「鬼の目を打つ。鬼外へ出よ。福内に入れ」と言つて四隅で四回ずつ豆を打ち、合計一六回打つのは、春夏秋冬の東西南北にわたつて災いを払って福徳を招くためだということです。

節分の豆まきは、一般に室町時代から行われるようになったといわれています。京都では、『花営三代記』応永三二年（一四二五）や『臥雲日件録拔尤』がうんにっけんろくぼつゆ文安四年（一四四七）二月二二日に、節分に「鬼は外、福は内」と言つて、歳徳神がいる明きの方（恵方）から豆をまき始めたという記事がのこされています。

こうした節分の豆まきが、日本中にどのように広まったのかはかならずしも明らかではありませんが、『陰陽雑書拔書』の記事は中世の陰陽道関連の知識としてあつかわれていたことを示していて興味深いといえます。節分行事の作法が、もともと民間に口伝えて伝承されていたものなのか、陰陽師や修験者が知識として教え広めたものなのか、その関係は明らかではありませんが、いずれにしても、節分行事の作法が、『陰陽雑書拔書』に書きとめられたことによって、これを

保持した代々の修験者は、この記載を参照して知識として保持することになったといえるでしょう。民俗行事の作法は、民間の口頭伝承とともに、文字で書かれた書物を介しても伝えられているのだということがわかります。俗信や民間知識といわれる民俗学の領域の知識が、口伝えと文字という質の異なる複数の方法で伝えられてきたことをよく示す資料ということができます。

(2) 書物の世界

◆書物の書写とそれが語ること

吉祥院の『簠簋傳』と龍藏院の『陰陽雜書拔書』（仮題）という二冊の書物は、ホウインが中世にさかのぼる書物を使いながら保存して、現代まで伝えてきたという共通点があります。さらに修験道に属する宗教者である彼らが、陰陽道の知識を大切に考えていて、活動の根拠にしていたことがわかる点でも興味深いというべきでしょう。

しかし、ホウインの資料を丁寧に見ていくと、そうした書物がそれらを必要とするところへと長い時間のあいだには移動していく様子をたどることができます。それは前近代の書物が筆写されることで次々と受けつがれていったことに基づく移動と、実際に特定の書物の所有者が変わること、動いていく場合とがあります。

こうした移動に関する情報は書物の奥書と呼ばれる最後の部分に記されていることが多く、かつての人びとの書物に対する愛着や、持つという行為にこめられた意味までをしのばせるものといえます。その点について龍藏院の持ち伝えた書物を中心に見ておくことにしましょう。

龍藏院が所有する中世に写された書物の中には、醍醐寺・根来寺・高野山などの中央の宗派の中核となる有名な寺院の本が、書写をくりかえして、会津にまでとりついたことを示すものがあります。『入仏安座作法』は、明応五年（一四九六）に道諭という学者でもあり僧侶でもあった人物の口伝を、根来寺の頼玄（一五〇六―一五八四、妙音院、定識房）が記し、弘治三年（一五五七）に量秀、元龜四年（一五七三）、天正四年（一五七六）に快尊、文祿五年（一五九六）に性盛という僧侶の所有を経て宥範という人物に伝えられたものであることが奥書からわかります。これは一冊の書物が何年もかけて必要とする人のところへと受けつがれていった例です。

一方で、中世の内容を記した文献が、近世を通じて写本のかたちで伝えられる場合があります。『五字真言陀羅尼門義』という本は、慶長九年（一六〇四）に東寺頼慶（一五六二―一六〇一）が撰述したのですが、延宝五年（一六七七）に智積院の俊賢が書写した本が、晁残房・為信房という僧侶が写したことを経て、只見の龍藏院の行鶴（二七六九―一八四三）のもとに至ったことが奥書から判明します。

また『水天供之次第』という本は、もともと応永五年（一三九六）に高野山の宥快が写し、永祿八年（一五六五）に快受の手をへて、延享二年（一七四五）に伊南古町（現在の南会津町古町）の円成院多門が書写したものです。『十八道糸玉抄』は、醍醐寺の僧侶である源雅の口決を、元龜二年（一五七一）に岩城薬王寺（福島県いわき市四倉町薬王寺）の純瑜（鏡算、一五二一―一五八二）が撰述したのですが、慶安三年（一六五〇）会津慶弁による書写本を、宝暦七年（一七七七）に伊南古町の円成院太阿が書写したものであることが、これも奥書からわかります。

東寺や高野山、醍醐寺といった仏教史のなかでも重要な寺院における学問の内容が書写という行為を通して奥会津にまでつながっていることがわかります。地域と時代をこえて知識が受けつがれ、リレーされていくことを、こうした書物の存在は物語っているのです。只見の修験道関係の聖教典籍は、ただしまい込まれていたのではなく、ある時期までは時代をこえて用いられていました。こうした、いわば道具としての書物は、所持・使用・参照がくりかえされて、やがて破損すると、写しをすることで内容が継承されていたといえるでしょう。こうした知識とその継承のダイナミズムは、書物という古文書とは異なる文字資料を分析することで明らかになるのです。

◆書物をめぐる地域のネットワーク

こうした本のなかに封じ込められた知識の時代をこえた継承の一方で、地域のなかで、本が移動し、知識をもたらず場合もありました。先の奥書からの情報がタテの継承を示すのに対して、ホウインだけに限らず、地域社会のさまざまな人たちがホウインの蔵書に関わっていたことも判明しています。いわばヨコの移動です。

先に述べた『水天供次第』や『十八道糸玉抄』は、南会津古町の円成院の聖教であったものが、龍蔵院に伝存したものですし、『役行者靈驗記』という修験道の開祖としてあがめられた人物をめぐる本は、龍蔵院から吉祥院に移動したことが奥書からわかります。会津の円成院・龍蔵院・吉祥院というホウインどうしの間で書物のやり取りが、おこなわれていたのです。

さらに、村びととの間で本が移動することもありました。『ぶんしやう物語』（寛文十一年（一

六七一」刊」という物語を記した書物には、「よこやま氏」と墨書があり、『さんげ物語』（刊記なし）には、「文政九（一八二六）六月吉日 小川恵助（印）」「よこやまうし」と墨書があります。横山氏、小川氏は只見町榎戸・小川の村びとの名まえです。

『庭訓往来註』（明暦元年（一六五五）刊）には「布沢村馬之助判」「布沢村小林丑之助、伊北之内布沢村持主長谷、持主馬助、布沢村馬之介、寛文拾壹辛亥ノ年（一六七二）求候也、兵右衛門内、南山之内針生村湯田兵衛門殿よりうられたり、但拾八歳「何れ共参也、榎戸むら龍王院内」といった墨書があります。この記述によつて南会津郡内の針生村・布沢村・榎戸村の村びとの手を経て、龍藏院（龍王院）に至ったものであることがわかります。

『諸宗宝鑑』（刊記なし）には、「七くわんのうち」「横山多藏 残り三くわん 法印二有」と朱書があり、「なら戸横山多藏」と墨書があります。これらの識語は、全七巻の書物を法印と村人が分け持っていたことを示すものでしょう。書物は必要とする人の手元にあるべきである、という考えかたが共有されていたのかもしれませんが。神道の祓いの儀礼に関する『中臣祓瑞穂抄』（万治二年（一六五九）刊）には、龍藏院のホウインが『中臣祓』を所望するので泉田村弥左衛門が寄贈する、という榎戸龍王院太夫へ宛てた手紙がはさんでありました。書物とその伝来事情を示す文書とが一緒になっていたことにより、修験者であるホウインが神道にも興味と関心を抱いていたことがわかるのです。

このように地域のなかには書物を軸とした知識に対する欲求があり、それは書物の移動というかたちである程度満たされていたらしいことがわかります。こうした地域の知のネットワークは、

支配や経済関係とは異なる人と人とのつきあいを示しています。まさにこの地域の文化とその変化を考える新しい材料といえるでしょう。

◆文学的な知識とその宗教的民俗的な意味

龍藏院・吉祥院の所持していた聖教典籍のなかには、和歌に関する書物もあります。和歌とホウインとはどのようなかわりがあるのか、すぐにはわからないのですが、一冊ずつ検討することで、修験道との接点が見えてくるようです。

室町時代の末ごろの写本である龍藏院の『伊勢物語註抜書』（仮題）は全部で十一丁ほどの比較的薄い本です。この本は和歌を先に掲げ、その後には物語を記すことにより和歌を注釈するという形式で書かれています。古くからさまざまな種類のある『伊勢物語』の注釈書の仲間です。これまでに知られているものとは似たものもありますが、内容は完全には一致せず、新発見ともいえるものです。

一方、吉祥院には『伊勢物語灌頂秘密之注文』という写本が伝来しています。こちらは江戸時代に写されたものですが、内容は『伊勢物語』を密教的に解釈し、主人公の在原業平を弘法大師空海と同体であるとする内容です。親本ははっきりとしませんが、神宮文庫に所蔵されている『伊勢物語髓脳』にある和歌五句五体説の記述や高野山の金剛三昧院に所蔵されている『伊勢所生日本記有識本性仁伝記』のなかの「第四 伊勢諸法形相ア字門の事」の記述と重なる部分があります。

こうした歌物語である『伊勢物語』の注釈書の存在は、和歌が文学としてではなく、宗教（密教）の知識と結びつけられていたことを示します。そして、それゆえにホウインたちからも興味を持たれたのでしょう。和歌は文学的な感興を示すものというだけではなく、深遠な宗教思想を象徴的に表現したもので、この点から宗教者にとって必須の教養であったことがうかがえます。

◆まじない歌の記述

さらに龍藏院には『徒然藻塩草修行日記』と題された写本があります。これは元禄十年（一六九七）に岩窓軒一斗という人物の撰によるもので「会津御領修行記」とも題されています。内容は奥会津地方各村の名所を詠んだ和歌が記され、巻末には七首の『百人一首』とその注釈、歌言葉の注釈、年中行事の由来なども書かれています。

この『修行記』の巻末に記されている『百人一首』の和歌の解釈は独特のもので、いわゆる伝統的な文学の枠組みに入らないものです。よく知られた「奥山に…」という和歌の例を引いてみましょう。

おくやまに紅葉ふみわけなく鹿の声きく時そ秋はかなしき

いと、たに秋はかなしきに、鹿のとふ音、紅葉はの落葉、おく山のやとすかた／＼おもひやられぬ。鹿の妻恋とて、猟師は女のあしあしだのはにて鹿笛をつくりて、男鹿女鹿をよひて命をころしぬ。女の髪筋にてよりし綱には大ぢうもつなきとまるよし、一箇ノ情は皆念のおこるよりかたちあらわれ、歌の道はかくかる／＼とよみしよりおこる。猿丸は猟師司にて、

日光権現も狛師頼赤城明神退治ましますなり。万事万三郎は猿丸の御末なり。大日本の嶽／＼知行したまふゆへに、霊仏山も皆／＼万三郎より大師／＼もかりたまふなり。狛けものを殺す時にとなへて曰、南無無量寿学仏必外無別法必仏及衆生ト唱エ申なり。是にて殺生の罪亡ひ申よし。

「奥山に」の和歌の作者とされる猿丸大夫は、ここでは日光権現を助けた狩人小野猿丸のことであり、鹿笛を吹いて女鹿を呼びだして狩りをすることを詠んだものだと思います。この日光山の神を助けたという説話は、猿丸説話とも呼ばれ、下野国の日光権現と宇都宮明神の縁起である『日光山縁起』（二荒山縁起）のなかに記されている小野猿丸が日光権現を助けて赤城明神を討つたという話と関わりがあります。『日光山縁起』の諸本の一つである『補陀落山祖秘録』には、猿丸が日光に狩りに来て「奥山に」の歌を詠ずる場面があり、この系統の写本は日光周辺に流布していたことが知られています。

つまりここでの「奥山に」の和歌の解釈は、『百人一首』の歌人猿丸大夫に、狩人小野猿丸を結びつけたものであり、野獣を成仏させる引導の呪文も付されていることから、まじない歌としての理解が示されているのです。それによれば、「奥山に」の和歌は野獣を弔い、獣の靈魂を山の神に返す儀礼の呪歌だったのです。これは狩猟が盛んであった東北地方の地域性に根ざした和歌解釈であり、とらえ方であるといえるでしょう。

(3) 書物とくらし

◆お経の裏と表

こういったまじないに関する知識は、口頭で伝えられ、秘密とされるのが本来の姿だったのでしょうが、文字を解する人びとの間では、記録され書くことで後世に受けつがれていくことも多かったです。植戸村のホウイン龍蔵院が保持してきた書物、すなわち聖教典籍にはもちろんお経（經典）も含まれています。經典は折本ですからすぐ拡げられますが、それを裏がえすと、裏にもたくさんのが書かれています。そうした經典類の裏に書かれているものに注目してみましよう。

『妙法蓮華經（卷第八）』の裏側、すなわち紙背には「諸修法」と題し、「懐胎之守」「六サン之事」といった知識が記載されています。『仏説聖不動經』の目録部分の紙背には「山神祓」「外獅子印」「疱瘡祭」といった知識が記されています。これらは単純に經典の裏が白紙であったから用いたという側面もありますが、法華經や不動經といったありがたいお経が記されているので、あえてその裏にまじないや修験道の修法（神仏を祀ってその力で人々の願いを実現させる作法）を書いたという側面とがあるでしょう。つまり記載された内容とともに、記載された紙にも意味があつたということを考えるべきでしょう。

こうした經典の裏表に書かれた知識は、表面の本来の經典は、宗教者であるホウインの理論的な性格を支えるものであり、裏側に記されたさまざまな知識は、ホウインがさまざまな知識を只見の生活のなかでの必要に応じて集めて、人々の願いに応じて実践していたことを示していると

言えるでしょう。これらの知識は表裏であるとともに一体であるということは、こうした知識の担い手であつたホウインたちの活動の内実をよく示しているといえるでしょう。

◆巻物とのかかわり

只見町は先に述べたように全国でも珍しい職人や儀礼に関する巻物が、濃密に伝えられてきた地域です。それらは只見の歴史を考える際に、地域史的なアプローチだけではなく、民俗学的な調査や分析を併用するべきであるということに気づかせてくれた重要な資料群でした。そうした巻物とホウインとの関係についても見ておきましょう。

龍藏院には、巻物のかたちをした多くの文書も伝えられていました。宗教者であるホウインが、こうした多種多様な巻物を持つているのはどうしてでしょうか。龍藏院が所有してきた巻物は「虚無僧巻物」「大工（系）景図秘書」「葺地立事」「山入巻物」などです。このうち「虚無僧巻物」はこれまでもふれてきたように、修験だけではない宗教者のネットワークの存在と関連があるものと思われる。江戸時代に虚無僧を統括していた普化宗が管理、実践している宗教知識にホウインが関心を抱いていたことを示すものと言つてよいでしょう。

「大工景図秘書」は大工という職人の神話的な起源と大工が関わる建築儀礼の意味や手順を書き記したものです。また「葺地立事」は屋根葺にまつわる神話的な知識について記したものです。これらは家を建てる際に必要な技術を宗教的に意味づけようとしたものということができるでしょう。

「山入巻物」は山に入って木を切り出す柚（木樵）が知っておくべき知識を記しており、「山神腹立日」「木鳴日」などといった項目があります。これらは陰陽道書である『簠簋』に載せられている知識を写したものです。しかし、これは単なる知識の書写ではないでしょう。『簠簋』の暦日に関する多種多様な知識のなかで、山中での生活や行動に必要な知識をホウインが選んで抜き出し、さらに巻物のかたちに仕立てたのです。

多種多様な巻物を龍蔵院という修験が持ち伝え、あるいは作り出していたということは極めて重要な発見であるといえます。ホウインの側からすれば、自らが保持あるいは管理している知識を、実際の只見の生活に当てはめていったのであり、さまざまな職人たちの側からすれば、自分たちの技術や職能を、宗教的に意味づけ、権威を与えてくれたということになります。ここに宗教的な知識がホウインという宗教者が管理する状態から一般の生活文化、すなわち民俗へと移行していくプロセスを見出すことができます。

4 歴史と文化を伝えるとりくみ

豊かな自然にかこまれた只見町の歴史と文化を掘りおこしていくと、ここまで述べてきたような、新しい重要な歴史文化資源を見出すことができました。これまでの内容を改めてふりかえり、歴史と文化を考える上での視点を導き出すことを意識しながら、最後にまとめてみましょう。

(1) これからの調査研究

◆ホウイン資料から明らかになった歴史と文化

奥会津の歴史を、地域史の成果をふまえて、さらに多角的に考えていくための材料としてホウイン（里修験）たちが伝えた書物、すなわち聖教典籍を位置づけることができます。その中には、ホウインたちが一般的によりどころとしていた修験道のほかにも、陰陽道の貴重な資料があることがわかりました。また京都をはじめとするさまざまな宗教の本拠地との本を通じて交流があったことも確認することができました。それだけではなく、こうした本はホウイン同士、宗教関係の人びと、さらには村びととの間を行き来して、多様な知識が広がっていったことを示しています。

今日では文学の世界に属すると思われる和歌もホウインの活動のなかでは、まじないと深く関わっていました。また、只見の民俗文化の特徴のひとつである巻物にもホウインは関係していたようです。

このように地方文書とはいえないような特殊で雑多な資料を、ひとつひとつ時代の制約や当時の状況を意識しながら位置づけていくと、只見の歴史と文化が、ぶ厚く多彩なものとして、わたしたちの前に姿をあらわしてきます。ここでは江戸時代の只見で活躍した吉祥院と龍蔵院という二軒のホウインの家に着目することで、只見だけではなく、東北地方、日本列島全体にも通じるいくつかの発見をすることができたのです。

◆歴史と文化を研究する拠点としてのホウイン屋敷

歴史や文化を考える際に、そのよりどころ、拠点となる存在をわたしたちは考えてきました。そして只見における調査研究で見えてきたのは、今ではすっかり普通の家のようになっていくかつてのホウインたちの屋敷が、実はきわめて重要な資料を長く蓄積してきたということでした。

歴代のホウインたちは、只見の生活と向きあいながら、一方で宗教者として、さらには知識人としてこの地域の文化に大きな貢献をしてきたのです。修験文書とか聖教典籍というとらえ方をしてきたこれらの資料群は、そのことを現代に伝えてくれる貴重な歴史と文化の資源でした。

建造物としてのホウインの家は一見するとふつうの家のようにも見えますが、よく観察すると、ふだんの生活に用いる出入り口と不動明王をはじめとするホウインたちが祀ってきた神仏を拝むための出入り口とが別々になっていることに気づきます。これはホウインが村びとであると同時に宗教者でもあったことを自らから示しているのとらえることができるでしょう。ホウインの屋敷の二つの入り口は、ここに住むひとが、



写真21 只見町塩ノ岐のホウイン和光院の外観

俗人と宗教者という二つの異なる役割を、只見のなかで果たしていたことをかたちとして示しています。それはまた、ここに蓄積した資料群が地域社会と宗教文化との両方の世界に開かれていることを示しているのです。【写真21、22】

地域社会において寺社がその歴史や文化をさぐる上で重要な存在であることはよく知られています。しかし、日本列島のなかには、かつては寺社に類する存在であっても近代化やその他の理由で、かつてはたしていた役割や機能が失われたり、見えづらくなっている場合も少なくありません。ここで見てきたホウインの資料はそれを意識することの重要性を訴えかけていると思われます。

◆寺社調査と書物調査

只見町ではこうしたホウイン資料の発見と位置づけから新たに町内の寺社仏閣に関する総合的な調査を開始しました（その成果の一端は『只見町神社仏閣悉皆調査概要』（二〇一七年）としてまとめられています）。その成果はこれから、さらに細かく分析、検討していかねばなりません。



写真22 昭和30年代の龍蔵院の外観

んが、寺社が地域の歴史と文化をさぐる重要なポイントとして、意識されるようになったことは大切な一歩です。

また町内のさまざまな書物についても、改めて一冊づつ取り上げて、内容だけではなく、伝来の経緯や読まれかた、保管のしかたなどについても検討を加えることが進められています。特に中世にまでさかのぼる書物は、同じ時期の歴史に関する資料が少ないだけに只見の歴史を書き直す可能性さえあるといえるでしょう（この点についても『奥会津の戦国文化をさぐる』というシンポジウムの報告書（二〇一八年）で言及されています）。

（2）歴史と文化を考えるために

◆さまざまな学問領域からの検討とその意義

地域の歴史や文化を考えるには、只見町でのとりくみのように、地域史の枠組みや研究の方法だけにこだわらず、より広い学問領域からのアプローチが必要です。さまざまな異なる視点からの調査研究が、地域の資料が持つ多元的な価値の発見につながるのです。地域の資料の一つの見方だけから位置づけるだけではもったいないともいえるでしょう。いろいろな角度から光をあて、またその分析のやり方を工夫することで、資料はより深い意味を、私たちに教えてくれるようになるでしょう。

こうしたさまざまな領域からの調査研究は、その過程も一緒に記録し、絶えずふりかえり、地域の財産としていくことも大切です。結果だけではなくプロセスを共有したり、意識したりする

ことで、地域の歴史文化の価値は、現代そして未来のわたしたちの本当の財産になっていくでしょう。

そして地域の資料は地域のなかで保管し、必要に応じて内外の研究に供することができ、態勢を作っていくことも必要です。かつて日本列島各地では、歴史民俗資料館や博物館がその役割をはたしてきました。しかし、単に資料を保管する空間だけであるならば、いつのまにか地域の現実の生活と距離が生まれてしまう可能性があります。これから大切なのは地域の人びとの興味や関心、期待や願望にも日常的にこたえることのできる空間を作りあげていくことではないでしょうか。

◆「核」とネットワーク

地域における資料の蓄積は、そのこと自体が歴史であり、文化の表れでもあります。その拠点をまるごと保存したり、活用することができれば、歴史と文化の拠点として、あるいはそのシンボルとして大きな意味を持つでしょう。

しかし、いつでも保全や保存が可能であるとは限りません。現代のめまぐるしい変転のなかで、歴史文化の保存拠点がかたちを失い、姿を変えることもあるでしょう。そうした時にでも歴史や文化を考えていく地域のなかの「核」を絶えず意識することを考えていかねばなりません。地域における歴史や文化は地域に住む人たちのものです。そしてそれは活字のなかにあるのではなく、生活とのつながりによって本当の意味を持つのです。

ですから地域の歴史や文化の「核」というのは、時にはかたちを持たない、人びとの心のなかにあるものといえるかもしれません。もう少し正確にいうのなら、そうした心のなかの歴史や文化への興味や関心を、絶えず呼び覚まし、行動にかきたて、またそれを助けることができるつながりを作りあげるべきだともいえるでしょう。

そうした活動や興味の深まりに応えてくれるのは、図書館や公民館などの活動です。もちろん図書館はそれ自体、独自の使命がありますし、公民館も生涯学習の拠点としての大きな役割を果たしてきました。決して歴史や文化の保存や継承のための施設ではありません。しかし、こうした地域のなかの公共的な空間が、歴史や文化を担い、受けついでいく上での「核」となりうることで、さらに歴史や文化を意識し、つないでいくネットワークのよりどころになることは明らかです。

現在にいたるまで地域に蓄積し、伝えられてきた歴史や文化の資料は、こうした「核」に集約したり、ネットワークのなかで活用されることで、新しい段階に進むのではないのでしょうか。こうしたさまざまな生涯学習、社会教育の施設と理念を結び合わせ、つないでいくことで地域における歴史や文化をさらに深く考えていくことを模索していきたいものです。

◆新しい地域文化の拠点をめざして

これまでの地域の歴史の研究は、自治体単位で資料を調べ、それぞれの市町村、あるいは都道府県の単位で記述がまとめられることが多くありました。しかし、人びとの生活は現代の自治体

の区分におさまっていたものではありません。たとえば、どんなにちいさな資料であっても、日本列島のさまざまな場所や人びとの交流や相互の刺激によって生み出されてきた場合があるので、これからの地域文化の調査・研究・活用は、現代の自治体の枠組みにとらわれずに、より広い人やものの流れ、互いの行き来を意識して考えていく必要があるでしょう。

最後に、こうした地域文化をとらえていく拠点作りに必要な条件についてふりかえっておきましょう。いつの時代、どのような状況のもとであっても、地域の文化の保全や保管、継承は前提です。そしてそれらを的確に把握し、後世に活かすことのできるような調査研究がなされなくてはなりません。その一方で、これまでの調査研究の枠組みや視点、方法に不断の反省を加え、新たな学問や研究手法の導入を忘れてはならないでしょう。特に激動する時代環境のなかで、新しい視点にもとづく調査は、地域の資料をより豊かなものとしてとらえる手がかりになるはずです。そうした複眼的な視座からの研究の積み重ねがあつてこそ、多くの人びとの期待や利用にこたえることのできる文化を見出し、残していくことができると思われまします。

それとともに、地域における文化の利活用にも途を開いていくことも忘れてはなりません。自治体や学問の枠はもちろん、時には国境もこえて、わたしたちの地域から生み出される文化をさまざまな交流のなかに置き、アジアや地球全体という単位で、文化の未来を考えることが求められています。そのために地域において、文化を受け継ぎ、日常的に意識し、思索を深めていくことができる空間や人びとのつながりを意識して育てていかなければなりません。

この本では福島県の只見町という地域で展開してきた歴史と文化をめぐる営みを、特にその研

究成果から紹介してきました。歴史と文化を地域の未来に活かしていく取り組みは、これからの課題といえます。そうしたアイデアや多様な視点による発見、多様な立場からの意見交換を、資料を目の前にして確認しながら、身近な問題として考えていく場を作っていく必要があります。研究拠点とは、建物や遺跡といったかたちのあるものだけではなくありません。歴史と文化に正面から向きあい、その価値と意味を絶えず考え続ける営みを支える場として構想されるべきだと考えられます。

〔参考文献〕

このブックレットでは全体を通して、かみくだいた表現を心がけました。詳細な学術的検討に取り組もうとされる場合には以下の参考文献等を参照し、手がかりとされることをおすすめします。

小池淳二「民俗知とは何か―宗教者概念の再検討―」（澤博勝・高埜利彦編『近世の宗教と社会（3）民衆の〈知〉と宗教』、吉川弘文館、二〇〇八年）

小池淳一「講の記録と伝承―会津只見における講の「人別帳」の分析から―」（『文字文化』は庶民の生活をどのように変えてきたか（二〇〇六―二〇〇八年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書、研究代表者 宮内貴久（お茶の水女子大学）、二〇〇九年）

小池淳一「修験蔵書にみる宗教知識の位相―福島県南会津地方から―」（松尾恒一編『東アジアの宗教文化―越境と変容―』、岩田書院、二〇一四年）

国立歴史民俗博物館＋小池淳一編『奥会津の戦国文化をさぐる—只見シンポジウム記録—』（国立歴史民俗博物館、二〇一八年）

只見町教育委員会編『只見町神社仏閣悉皆調査概要』（只見町教育委員会、二〇一七年）

新国勇『只見の自然を楽しむ本』（只見の自然に学ぶ会、二〇一四年）

久野俊彦編『龍藏院聖教典籍文書類目録』（国立歴史民俗博物館、二〇一〇年）

久野俊彦・小池淳一編『竈篋傳・陰陽雜書拔書』（岩田書院、二〇一〇年）

久野俊彦「奥会津の修験龍藏院における修験道聖教典籍の多様性」（林雅彦・小池淳一編『唱導文化の比較研究』、岩田書院、二〇一一年）

久野俊彦「修験道儀礼の和歌と修験者の和歌技芸—地方の修験道聖教典籍の調査から—」（錦仁編『中世文学と隣接諸学6・中世詩歌の本質と連関』、竹林舎、二〇一二年）

久野俊彦「奥会津から見る日本の聖教典籍文化—地域における里山伏（法印）の文化活動—」（『説話文学研究』四七号、二〇一二年）

藤田定興『近世修験道の地域的展開』（岩田書院、一九九六年）

『図説 会津只見の民具』（只見町教育委員会、一九九二年）

『吉祥院聖教典籍文書類目録』（只見町教育委員会、二〇一四年）

『医家原田家書籍目録』（只見町教育委員会、二〇一六年）

『只見おもしろ学ガイドブック（改訂版）』（福島県只見町教育委員会、二〇一七年）

www.tadami.gr.jp/abouttown/summary/summary.html (2018/2/4 閲覧)

久野 俊彦 (ひさの としひこ)

所 属 東洋大学（非常勤講師）

専 門 分 野 民俗学、説話文学

著 作 『絵解きと縁起のフォークロア』（森話社、2008年）
『日本の霊山読み解き辞典』（共編、柏書房、2014年）ほか。

小池 淳一 (こいけ じゅんいち)

所 属 国立歴史民俗博物館

専 門 分 野 民俗学、信仰史

著 作 『陰陽道の歴史民俗学的研究』（角川学芸出版、2011年）
『季節のなかの神々―歳時民俗考―』（春秋社、2015年）ほか。

【写真提供】新国 勇

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」ブックレット

新しい地域文化研究の可能性を求めて vol.2
歴史と文化のよりどころを求めて—福島県只見町から

発行日／2018年3月30日

著 者／久野俊彦・小池淳一

発 行／人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

印 刷／株式会社 弘 文 社

新しい地域文化研究の可能性を求めて

Vol.2 2018年3月

■歴史と文化のよりどころを求めて―福島県只見町から

1. 地域史の先に見えてきたもの
2. ホウインという存在
3. ホウインをめぐる書物世界のひろがりにつながり
4. 歴史と文化を伝えるとりくみ

久野俊彦・小池淳一

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

